カフェー

勝本清一郎

青空文庫

文学や美術とカフェーとの交渉の日本におけるいちばん古いところは、明治二十一年四月、東京下谷区上野西黒門町二番地、元御成道警察署南隣に可否茶館が初めてできたとき、硯友社のまだ若かった作家たちが出入りした話からである。この可否茶館が日本におけるカフェーの最初であるからこれより古いという交渉はない。江戸時代の水茶屋まで範囲に入れるとすれば司馬江漢の銅版画「両国橋」に両国河岸のよしず張りの水茶屋の情景、春信のにしき絵に笠森稲荷茶店の図、政信の墨刷りにしがらき茶店の図その他があり、春信の作品は後の邦枝完二の小説「おせん」や小村雲岱の版画の素材になっている。

しかし水茶屋の系統は別としよう。これに似たものはいまでもエジプトやトルコへゆくと、やはり道ばたの茶店のような構えで、柄のついたパイプ型真鍮製の小容器でコーヒーを濃く煮ている光景にぶつかるが、そういうコーヒーの飲みかたは日本に伝わらなかった。日本のコーヒー、コーヒー店も西欧系である。

硯友社の機関誌「我楽多文庫」の公刊第一号（明治二十一年五月）に「下谷西黒門町可否茶館告条」という石橋思案の一文が出ており、それに開業したばかりの可否茶館をさして「西洋御待合所」とうたってある。

この「我楽多文庫」が「文庫」と改題されてからの第十九号（明治二十二年四月）には川上眉山の「黄菊白菊」という小説の第五回が出ていて、そこに可否茶館の場をとらえた文章とその場を描いたさし絵がある。画中の文字は紅葉の筆跡である。

この文章と絵が日本の文芸・美術に日本のカフェーが登場した最初である。絵を見ると驚くことに和服の女学生が非常に長いはおりを着て、洋ぐつをはいている。男の長いはおりは江戸時代の天明年間に流行して、清長の絵に残っているが、外とうのように長い女のはおりというものは、茶ばおり流行のいまの日本人の記憶にはもうない。文章はこんな文体である。

「敬三は下谷の可否茶館に。そゞろあるきの足休めして。安楽椅子に腰の疲を慰め。一碗の珈琲に。お客様の役目をすまして。新聞雑誌気に向いた所ばかり読ちらして余念と苦労は露ほどもなかりし。隣のテーブルには束髪の娘二人」

石橋思案の「告条」には「茶ばかり飲むも至つて御愛嬌の薄き物と存じトランプ、クリケット、碁将棋、其外内外の新誌は手の届き候丈け相集め申置候」とか「文房室には筆硯小説等備へつけ、また化粧室と申す小意気な別室をもしつらへ置候へば其処にて沢山御めかし被下度候」とかある。クリケットという遊びは私の小学生時代、慶応義塾幼稚舎ではまだ行なわれていた。

可否茶館の開業にさいしては「可否茶館広告、附、世界茶館事情」というパンフレットが配布された。それによると、パリのカフェーの元祖はサンゼルマン街にアルメニア人パスカルの開業したもので、一七八五年版ジュラウルの「巴里名所記」にそのことが出ているよしである。

なお茶館という名称からもわかるとおり、中国茶館の系統も引いている。主人は長崎生まれの鄭永慶という人で、石橋思案も長崎生まれだったことから硯友社の面々が後援した。思案はこの可否茶館を会場にして東京金蘭会と称する男女交際会の会合をしばしば催した。その会では当時の帝大生たちが流行の清楽合奏などしたが、主

宰者の思案もまだ二十歳代の学生だった。

　可否茶館は二階建ての洋館で庭も二百坪ほどあった。二階の席料が一人一銭五厘、階下は広間で無料。コーヒーのねだんは牛乳を入れないのが一杯一銭五厘、入れたのが二銭、菓子付きで三銭。酒類はベルモット二銭五厘、ブランディー三銭、ぶどう酒二銭七厘、ビールがストックビール小びん十五銭。たばこは鹿印二十本二銭……。いまではこれらのねだんはすべて五千倍を越えている。

　ただし可否茶館は客がきわめて少なく、いついってもすいていたよしで、まもなく廃業した。したがって初期カフェー文学は、文明開化思潮の中でハイカラ風俗小説を目ざしていた初期硯友社の作家たちによってもそれきり発展せずに終わった。

＊

　明治二十三年一月、森鴎外は有名な「舞姫」を発表。この中に主人公太田豊太郎がベルリンで、生活の資のために日本の新聞社の通信員となり、カフェーに新聞紙を読みにかよう個所がある。「余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出でゝ彼此と材料を集む。」

　キヨオニヒ街とはいま普通に書けば西ベルリン区域のケーニッヒ街二十二、四番地、間口がせまく奥行きが長い休息所というのはグンペルトといった古いカフェーで、わたしもしばしば訪れたことがあるが、ガラス天井の室の壁ぎわにはヨーロッパじゅうの新聞紙が掛けられてあった。

「舞姫」よりのちに発表されたが、執筆はそれにさきだち、鴎外の処女作だった「うたかたの記」にもドイツ・ミュンヘン市の美術学校前のカッフエ・ミネルワの場がある。それは実際の名で、鴎外はここの常連の芸術家仲間のうちに日本人画家原田直次郎を見出したのである。ほかにカッフエ・ロリアンなどという名も出てくる。

　鴎外はミネルワの仲間という語を使ったが、十九世紀末から二十世紀はじめにかけては各種の芸術運動がパリやミュンヘンやベルリンで、カフェーでの集まりから出発した例が多い。

　いまルーブルにあるルノアールのけんらんたる大作「ムーラン・ド・ギャレット」も、野天のダンス場の景だがカフェーの延長線だ。プッチーニ作曲の歌劇「ラ・ボエーム」第二幕のパリのカフェーのテラスの場も有名で、音楽も情景もかれんで写実的に美しい。

　この歌劇が大正年間日本で初演されたときに、人もあろうに大田黒元雄が雪の降っている晩に戸外でストーブをたきコーヒーを飲んでいる光景は、歌劇の荒唐無稽さだが、と解説したことがある。荒唐無稽どころかパリへいってみればそれが写実なのであって、大正年間になっても、いかに日本でパリのカフェーの実際が知られていなかったかを示す例である。

　明治末期から大正初期にかけて若き日の木下杢太郎、吉井勇、北原白秋、高村光太郎、木村荘八、長田秀雄、谷崎潤一郎たちパンの会の連中が、会場にカフェーらしい家を捜すのにどんなに難儀したか。

　両国橋畔の第一やまと、永代橋ぎわの永代亭、大伝馬町の三州屋、鳥料理都川、小網町のメエゾン・コオノス。西洋料理屋といっても牛なべ屋にちかく、コオノスがいちばんフランスのカフェーの感じだった。

主人に画心があって鴻巣山人とサインした版画をわたしは持つ。五色の酒を作って客に出したのもここの主人だ。この線がやがて銀座のプランタンへいく。プランタンの主人は本職の洋画家だった。しかしパンの会の歴史は結局、フランス系のカフェーを捜して得られなかった歴史である。

なお鴎外のドイツ日記にはまだたくさんカフェーの名がある。中央骨喜堂、ウェル骨喜堂、大陸骨喜店、国民骨喜店、クレップス氏珈琲店、シルレル骨喜店、ヨスチイ骨喜店、骨喜店はカフェーのあて字。

明治十九年二月二十日の条には「伯林には青楼なし。故に珈琲店は娼婦の巣窟と為り、甚しきに至りては十字街頭客を招き色をひさげり」と書き、さらにクレップス氏珈琲店の個所には「美人多し。云ふ売笑婦なりと」ともある。

このクレップスはベルリンのノイエ・ウィルヘルム街にあってもっぱら日本人相手の店だった。鴎外は漢字に訳して蟹屋と書いたこともある。わたしが後年いったころにはこれに類する家はビクトリア・ルイゼ広場にあって比丘と略称されていた。もちろん尼さんスタイルでサービスしたわけではない。ゲイシャというカフェーもあった。

鴎外留学時代に始まるこの蟹屋、比丘、ゲイシャの線が大正期に盛った日本のカフェーの型の元である。だからそれは必ずしも大阪から東京への流れだけではない。この型の世界から荷風の「つゆのあとさき」のような傑作が生まれているのは、荷風がもう一つの意味でも鴎外のでしだったことを語る。それにしても、あれほどフランス好きでドイツと日本のことならなんでも悪口のタネにした荷風が、銀座のカフェーがドイツ流だったことに気がつかなかったのははなはだ愉快である。いまの洞窟喫茶、深夜喫茶もまたドイツ系である。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆　別巻3　珈琲」作品社
　　1991（平成3）年5月25日第1刷発行
底本の親本：「近代文学ノート　4」みすず書房
　　1980（昭和55）年10月30日発行
初出：「共同通信社配信　第32～33回」共同通信社
　　1964（昭和39）年4月
※初出時の表題は「カフェー（酒場）」です。
入力：大久保ゆう
校正：富田晶子
2018年1月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カフェー

勝本清一郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/